

Color Esperanza

Luis Felipe Fujimoto (指導教員 八尾 廣)

1、はじめに

日本の海外移住は 1866 年に海外渡航禁止令（鎖国令）が解かれてから、100 年以上の歴史があります。海外へは新たな技術を獲得のために渡りました。

逆に、日本へ勉学・就労のために移住してくる外国人も多くなり、様々な文化の交流ができる国になり始めました。

これにより、新たな技術や他国への進出も気軽にできるようになりました。しかし、子どもの勉学が追いつかない問題や人とのコミュニケーションができない問題が増えています。私はこのような問題は互いが互いの文化を知ることにより解決できると考えた。

2、タイトルの意味

Color Esperanza の意味とは、スペイン語で「たかさんの色」、「色の奇跡」といった二つの意味を持つ。私はこの意味のように様々な国の人が混ざり合い、互いを刺激し合い新たな何かを生み出せると思ったからです。



3、全体コンセプト

相模原市キャンプ淵野辺はもともと米軍基地陸軍機構学校として使用されており、昔から外国人とのつながりが深かった土地である。現在は土地の全面返還があり、基地の移動で周りには住居、跡地には公共施設が立ち並ぶようになった。

だが、文化施設といったものが少なく、多文化とのつ

ながりやふれあいが衰えてしまった。

そこで、日本人と外国人が自分たちの文化を教えあい、学びあう施設を考えました。

また、周りの博物館やフィルムセンターとの合同イベント等を企画、開催できるような広場づくりを中心にランドスケープの構成を考えました。これにより、人々にとって住みやすい町になって、町全体が盛り上がって欲しいと考えました。



4.敷地



キャンプ淵野辺 (Xゾーン)

- ・ 敷地面積 72,000 m² (7.2ha)
- ・ 建ぺい率 60%

・周りには、博物館、球場、学校等が多く密集していて地域全体の雰囲気はとても落ち着いている。昼間と夕方の時間帯は登下校の学生やジョギングの人でにぎわい。歩道で話し合ってる人々が多くいる。

しかし、夜間は敷地の木等で周りがとても暗く外出する人が少ない。これにより、さらに夜の雰囲気が悪くなっていて周辺住民や学生を対象にした犯罪が多く発生している。



5、コンセプト

今回設計した建物は 1.外国人、2.学生、3.周辺住民に見立てた建物が 4.自然の上で交じり合い、交じり合った場所で空間が生まれる。

建物の中身は

1F 外国文化展示スペース、

2F 学生作品展示スペース、

3F～4F 制作スペース、

5F 企業向け相談スペース、

6F ホール、会議室、事務室（企業向け）、

7F～10F 体験スペース（様々な国の伝統工芸品を制作したり学んだりできる。）

11F～14F 交流スペース（他国語を学んだり、セミナー、報告会を開催できる。）

6、最後に

この施設で学んだ学生や刺激を受けた人々が多文化、海外に興味を沸き立たせ、世界に進出して様々な分野の情報を取り入れ、情報を発信する場となるでしょう。

